

医事・文談 九百四十五 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その233
子規と漱石(四十二たび続)

前号に載せた上野家の階下平面図は、図が小さく、しかも説明の字も読み難いものであった。今回は少しく拡大し、読み取れた字は鮮明にして、読者の方々の理解を助けることとする。

離れが二階建であるから、母屋も勿論二階建であったと思われる。祖父が階下の座敷に住んでいたたので、他の家族は階上に居住していたのである。

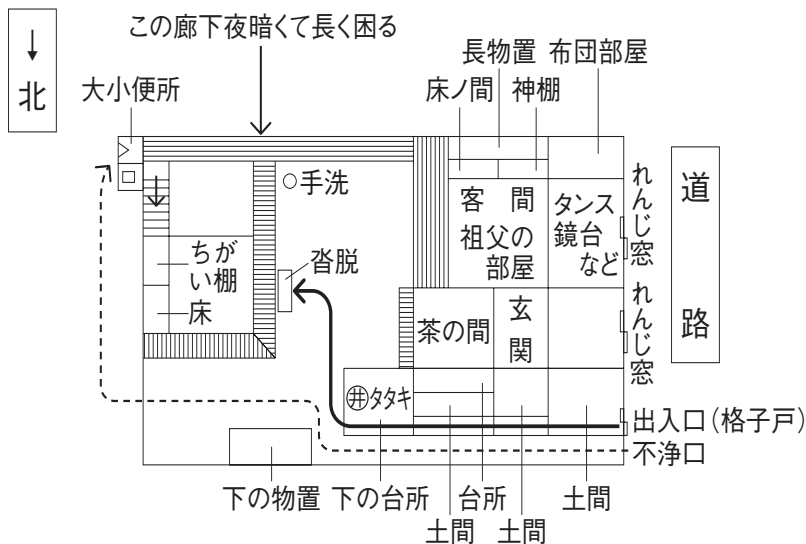
台所に隣るタタキに井戸があり、食事などは茶の間で一家でかこんだのであろう。

母屋と離れで、しかも二階建でかなり広い住宅なのに便所は一箇所しかない。それも離れの隅にあったので、孫のより江の注記によると「廊下が薄暗くて長く、いつもコワクテ困り候」とある。子供にとって夜の便所通いは薄気味の悪いものであった。

当時のことであるから便所は当然、汲み取り式のものであって、満杯になると出入りの農家が汲み取りに来るものであった。その肥たごを運び出すところが不浄口で、図の右下にある。

漱石、子規が居住した離れへは出入口から屋内の通路を通り往来しようである。不浄口から出入りした方が、家人を煩わさなかつたかと思われるが、より江の記憶では、出入口から、離れのぬれ縁の前の沓脱のところへ通ったのである。子規の門下の松風会の面々も、日夜ここを通ったものだろう。

図の実線は離れへの客が通った通路。漱石も子規もここから、出入りしたのだ。点線は下肥を汲んで運んだ路地。



(表紙写真)

野草便り - カンボク -

苫小牧市医師会 山本 一男

カンボクは漢字で「肝木」と書く。スイカズラ科に属する、高さ3～5mの落葉低木である。初夏に白い花が咲くが、花冠周囲の大きな花は装飾花で、本来の花は中心部にあるが、小

さくて目立たない。材は白色で柔らかく香気があるので楊枝に適している。

果実は熟すると写真のように透明感のある赤色となり、秋の青空によく映える。